

# 日本を広く使う

ながれ

十文字 修 (じゅうもんじ おさむ／新潟県佐渡島在住)

これまでの私の62年間はざっくり分けると、前半は大都市横浜で、後半は離島佐渡で過ごしてきた。前者は膨張と過密、後者は収縮と過疎。そんな正反対の様相の二つの場所には、無論それぞれの地域特性による幸せがあり、そして不幸せがある。その当事者としてここまできた結果、これからは次のようなスローガンを、個人的に掲げることに決めた。「世界を広く使えば、地域は衰える。日本を広く使えば、地域は息を吹き返す」。

## ●横浜から佐渡へ

1960年頃の横浜郊外部は、まだ農村の雰囲気が残っており、その田んぼを埋めて造成された団地で私は生まれた。以降、二十年でその辺りの人口は十倍になり、さらにその後も爆発的增加はつづいた。

緑の里山の起伏が、月面のごとく赤茶色にならされた茫漠たる造成地にかわる。そこに新しい住宅群が立ち並ぶのを見ながら私は育った。二十歳を過ぎたころ、たまたま開発から残された1キロほどの谷戸（谷と丘がセットになった里山を呼ぶ多摩丘陵あたりの方言）に、横浜市の公園計画があることを知った。そこで仲間や協力者を募り、以後十数年の取組を経て、その谷戸を原型のまま保全した公園が実現した。新建材の住宅の大海に浮かぶ、孤島のような谷戸公園である。市民が谷戸田で米を収穫し、丘陵で草刈し、雑木を伐って萌芽更新をうながし木炭を焼く公園である。

この運動の仲間は皆、全国各地から都会に移り住んできた人たちだった。私には彼ら彼女らが「持ってきた地方」が面白くて仕方な

かった。例えばハザ掛けに使う長い竹竿の担ぎ方、深く打ち込み過ぎた杭の抜き方など。自然と近しく生きてきた日本人の知恵を、日々垣間見ることが多かった。

しかし一体何故、彼らは故郷を後にしたのだろうか。続々と大都市周辺に吸い寄せられる人、また人。「地方はどういうことになっているのか」。実際に、地方に身を置いて何が起きているのか確かめてみよう。2002年、42才の時、一家五人で日本海の佐渡島に移住した。

## ●二つの風景

佐渡にはいま、二つの風景がある。紺碧の海と美しい山並み、ひろがる水田と木造の伝統的な街並みが醸す安らぎ。都会にはないゆったりした時間の流れ。それに惹かれて若い移住者が次々にやってくる。

その一方で、島の地域社会は音を立てて崩れつづける。私が島民になった二十年の間に、島民人口は七万人台から、まもなく五万人を切るまでに減った。※最盛期は十二万人。高齢化率は四割をこえ、独居老人が増える。

銃声もないのに商店街に人影なく、爆撃もないのに病院や学校や祭りがなくなる。戦地のように子供は殺されずにただ減る。戦争のごとき目に見える悲惨さのないまま、地域がひっそりと閉じる。しかしその一方で、移住者やUターン者によるカフェやお店が次つぎに開店し、雑誌をにぎわす。

それは佐渡にかぎらず、日本中の地方、中山間地、離島で視られる今日の二つの風景である。私はそこに滅びと再生の予感をともに感じる。その深いところにはきっと一つの大

きな根があるのだ。それはおそらく時代が生んだ「ある種の経済学」の思考モデルであり、それと時の政治や人々の意識が強固に絡み合ったカタマリ状のものである。そしてそのカタマリを穏やかに、それぞれの場所で解きほぐそうとする老若男女の姿がある。

### ●今いちどこの国土を

それがどんな名の思想であれ、施策であれ、社会科学であれ、いい。私もまた佐渡で、そしてこの日本列島で、地方、地域、津々浦々にて老若男女がまずまず幸せに暮らしていくためのビジョンを、あらためて見出したい。そう切実に念じている。

何よりも必要なのは、地球大の複雑で流動的な世界情勢に一蓮托生、いつも右往左往させられる不安定な国から、少しずつでも脱することではないか。そして、自分たちが共通して暮らす日本列島とじっくり向かい合うことだ。

南北に長く、複雑な海岸線と山や川や平野のある自分たちの国土を、資源を、文化を、経験をどのように引継ぎ十分に使いこなしていくか。内需であれ、関税をはじめ税制であれ補助金であれ、国内の仕組み、一国の施策を十全に駆使することで、自分たちの国土をもっと使いこなす。そのことで私たち国民が、見かけはきらびやかでなくとも、今よりずっと健全に暮らせる方法はあるのではないか。国とは、この国土を地球の一部であることも含めて過不足なく生かし、将来世代に手渡す方策を、国民全体が同じ国土を囲んで熟議する、そのための仕組みではないか。

### ●幸せのための経済学を

人間とは利潤追求を第一とする生き物である、などと位置付けるようなエセ科学ではなく、慎ましくとも心身に情と理性が細やかに

通い、共に生きることの喜びと実利を知り、子々孫々のための環境を脅かさない。そういう人間の本性こそを励ますような経済学が出てきてほしい。例えば、亡くなった宇沢弘文さんが唱えた「社会的共通資本」とは、そのために私たちに託された手がかりではないか。

逆にそれぞれの国の風土をもっぱら利潤目的に消耗する経済体制は、それぞれの国の人間の身心の健康も自然環境もともに損なう。目先の利益のために、都市に人を集中し大量生産、大量消費で稼ぎ、大量廃棄につづく。同じ国内の肥沃だった農地や山林は見る影もなく荒廃してゆく。それに足並みを揃えるように、他国では地下水を乱費したり森林を切り拓いたりして、持続不能な収奪型の大規模農業によって安価な農産物を大量輸出する。

私たちの国、日本は今はまだかわらず、猛烈に東京一極に集中しながら、屈曲し折りたたまれ、窮屈に縮みこみ続けている。大量のモノとカネを海外とやりとりする一方で、豊かな山林や海や、田畑を有効に使うことをやめ、足元に放棄してゆく。それらを使いこなす知恵、それらを軸にした人と人、人と自然の関わり方が忘れ去られてゆく。

でも今起きていることは、それだけだろうか。この国を地域内、地域間で個性豊かに広く使いこなす、日本列島の分に合った暮らしで満ち足りようという老若男女の姿も、また目に付くようになってきた。そんな気がする。私はそこに一縷の希望を見る。

広く世界に目を向けるなら、そちらにはモノやカネのやりとりの代わりに、心通う友人を多く得る。そういう流儀の人たちとたまに会う。つぎの日本が視えている、そんなまなざしを持つ人たちとの対話に何より救われる。それが現在の私である。